

令和 7 年度

社 会 人 特 別 選 抜 試 験 問 題

保健福祉学部
保健福祉学科

看護学コース
理学療法学コース
作業療法学コース
コミュニケーション障害学コース
人間福祉学コース

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（8 頁）には、解答用紙（3 枚）及び下書き用紙（1 枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確認、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入しなさい。
- 5 句読点は、1 字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

課題文を読み、後の問いに答えなさい。

【課題文】

2011 年の東日本大震災では福島第一原子力発電所が重大な事故を起こし、放射性物質が大量に漏出した。福島県の太平洋寄りにあたる浜通り一帯は汚染され、ピーク時には約 16 万人の住民が避難を余儀なくされた。

その際に問題になったのが、放射線被曝量による健康被害リスクの解釈である。多くの専門家は、100 ミリシーベルト以下の被曝量では大きな健康被害リスクはないという科学的データをもとに、避難するべきか留まるべきかの助言を地域住民にしていたが、住民のあいだでは、これでは日常生活の中でのさまざまな行動や場面がどの程度安全なのか、たとえば庭の井戸水は飲んでも安全なのか、洗濯物を干しても大丈夫なのか、といった行動の基準がわからないという不満と不安が大きくなるばかりだった。

当時のアンケート調査で、(1) この事故によって科学者・技術者に対する信頼感が大きく低下したことが明らかになっている。

一部の専門家のいう情報は、間違いではない。しかし、科学的なデータが日常生活の中でどのような意味づけをもっているかは、生活のあり方やリスクの捉え方など、生活者一人ひとりによって大きく異なる。それをすべて一律に、「この条件を満たしているから安全だ」と同じ基準を受け入れてもらうことには無理がある。生活者個々の生活の多様性を無視した発言だからだ。

同じようなことは日本だけでなく、他の国でも繰り返し起こっている。たとえばイギリスでは、チェルノブイリ原発事故後に放射能汚染が基準値を超えたセラフィールド地区のヒツジの扱いに関して、ヒツジの生態や現地の状況に無知な専門家たちが現実離れした助言をして牧羊農家からの信頼を失った事例が知られている。

この状況を詳しく調査したイギリスの科学技術社会論研究者ブライアン・ウィンは、「羊飼いたちは科学的な事柄については、科学者に不信感をもってはいなかった。科学者が丘陵地帯での牧羊の環境や実際の動向などに無知であることを見たときに、不信感をあらわにしたのだ」と指摘している。

誰もが、自分の生活や人生についてはいちばんの専門家だ。そこについてさほど詳しくない人、あるいは人生観が違う人、価値観が異なる人が、悪気はなくても偉そうに助言を垂れば、良い気持ちはしない。はいそうですか、と素直に受け入れられないのは当然だ。専門家が語る科学知は、生活知として有効な形に変換されていないからだ。

このように、科学だけでは良し悪しを決められない問題、あるいはそういう状態のことを、「トランス・サイエンス (trans science)」という。科学技術が進めば進むほど、トランス・サイエンス領域は広がっていく。

「知識は力なり」という見方からすれば逆説的に聞こえるが、考えてみれば当然のことである。科学技術が進むということは、科学的に理解でき、技術的に解決できる問題はどんどんカバーされていくことを意味する。日食は太陽の神が愚かな人類に怒って雲隠れするのではないことも、雷は空中の放電現象であって空の神様が^{ほうこう}咆哮しているのではないことも、日照りが続くのは気象現象であることも、すべて科学によって解明されてきた。今や、これらの現象を神や天が怒っているのだと恐れおののくことはない。日食などは、むしろ天体観測ショーとして楽しみの対象にすらなっている。

だけど、人々が不安に感じる現象がなくなったかといえば、そんなことは決していない。どんなに科学技術が発展しても、すべてを測定できるわけではないのだから、(2) 未解明の領域 (トランス・サイエンス領域) がゼロになることはありえない。そして、残された、科学的に未解明な領域には、注目がどんどん集まる。さらに、どれくらいリスクであれば安心できるのかについては、個人差も大きい。したがって、未解明部分のあいまいさの比重が増していく。

このように、科学技術が進めば進むほど、人々と社会はリスクに敏感になる。これは、ドイツの社会学者ウルリヒ・ベックが「リスク社会 (risk society; Risikogesellschaft)」論で唱えているところである。

やっかいなのは、しかしそれでも、専門的な事柄については専門知以外に頼るべき知識はないところにある。末期がんで苦しむ人が、標準治療以外のさまざまな代替医療 (おまじない的なもの) に手を出すことはしばしば知られているが、それが成功することはまずない。標準治療は、現代の医学の知識が今までの経験知も加味してつくり上げた最良の治療法であり、標準治療以上の治療効果をもつ

治療法はない。それ以外に頼れる方法はないのだ。

しかし、そうとわかっていても、人によっては薬^{くすり}をもつかむ気持ちになってしまいうのも、当然と言えは当然のことである。末期がんで苦しむことを、オバケを怖がることと同列に論じるのは不謹慎ではあるけれども、心理的なメカニズムとしては、オバケはいないとわかっていても、わけあり物件は借りたくないと思うのと類似の現象である。

何かをするとか受け入れるとかの意思決定の際には、人は合理的な思考回路だけで判断するのではなく、情動にもとづく思考回路も同時に作動している。情動はしばしば、合理的な判断を妨げる要素として蔑^{さげす}まれてきたけれども、近年の認知科学や進化心理学の研究成果によれば、むしろ情動回路が適切に機能することで、初めて合理的な回路もきちんと作動することが知られている。理性と情動、どちらも大事なのだ。

だから、(3) 科学的知識と日常的知識とを、対立するものとして捉えるのではなく、相互に補完するものとして捉えるべきなのだ。

標準治療が最良の方法であることは前提として、それでもうまくいかないときにどのようにして心の平穏を得るのか。たとえば、医師も交えて、家族やカウンセラーなどと一緒に模索する。

放射能汚染が心配であれば、放射線量の実測値を自分はどのように感じるのか、自分のライフスタイルのなかで許容範囲を模索していく。これも、専門家やアドバイザーたちとの共同作業になるだろう。実際、福島などさまざまな地域で、原発事故後に放射線量を実測し、その数値データを専門家と一緒に検討しながら自分たちの生活をどのように設計していくかを考え、実践して成果を上げてきた行政の活動や市民グループがいくつもある。

科学知識だけではなく、技術についても、その使い方を決めていくのは社会であり、ユーザーである。製品の使用法が、開発者や製造者が意図していたようなものとはならず、別の用途や目的で使われるということは珍しくない。むしろふつうである。

イノベーションの社会的ダイナミクスについて、時代を先駆けた展望を語ったアメリカのイノベーション研究者エヴェレット・ロジャーズは、新しく開発された製品が市場に出て普及していくプロセスを分析し、社会での使われ方は開発者

が想定していたとおりではなく、むしろ新製品にいち早く飛びつく初期導入者が使い方をあれこれ考えて生み出していくことが多いと指摘している。

よく知られている例は電話である。電話の発明者が誰なのかは論争のあるところだが、それはさておき、電話の新規発明に関わった人たちは誰ひとりとして、これが双方向のコミュニケーションに使われることは想定していなかった。高価な電話機がそんなに普及する状況は想像しておらず、せいぜい村に一台とかそんなものだろうと考えていたので、無医村でのケガや病気の治療を医師が指示するとか、軍隊で司令官が前線に指示を出すなどの、一方向の情報伝達の道具と考えていたのである。

しかし、受話器が一家に一台普及するようになると、公的な情報伝達だけでなく、むしろ私的な双方向のやりとりに使われるようになり、携帯電話の普及によってその傾向がさらに強まって今に至っている。

もっと最近の事例は、今ならもれなくスマートフォンについているカメラ、いわゆる写メである。これは当時、J-フォンにいた電気工学エンジニアの高尾慶二が箱根でロープウェイに乗った際、乗り合わせた女性がせっせと携帯メールを打っているのを目撃し、目の前の景色の美しさを伝えているのならば、いっそ「携帯電話で写真を撮れるようにし、それをメールで送ることができたらもっと便利になるのではないか」と思いついたことに端を発している。

興味深いことに、高尾は「開発者である前に、生活者である自分が最も欲しいと思う機能を具現化した」と述懐している。これはまさに、技術の新しい機能が技術開発側の視点ではなく、ユーザー側の視点からなされたことを示している。

このような、使用者など社会の側が技術の使用法を変えていくプロセスを「技術の社会的形成 (social shaping of technology: SST)」とよぶ。新しい技術が登場すると、ぼくたちはついつい、それによって社会がどう変わるかということばかりに目がいくが、社会は技術に対してつねに受け身であるわけではない。技術の側も、社会によって変えられていくのである。

そして、そうやって変えられた技術が、ふたたび社会に影響を与えていく。

出典：佐倉 統著『科学とはなにかー新しい科学論、いま必要な三つの視点』
(講談社、2020年)、一部改変。

【問 1】 下線部 (1)「この事故によって科学者・技術者に対する信頼感が大きく低下した」のはなぜか、著者の考えを 75 字以上 100 字以内で述べなさい。

【問 2】 下線部 (2)「未解明の領域（トランス・サイエンス領域）がゼロになることはありえない。」とあるが、なぜ著者はそのように述べているのか、40 字以内で述べなさい。

【問 3】 下線部 (3)「科学的知識と日常的知識とを、対立するものとして捉えるのではなく、相互に補完するものとして捉えるべき」と筆者は述べているが、そのことについてあなたの周りにある事象の中であてはまると思うことを 450 字以上 500 字以内で述べなさい。